

「主の洗礼」

マタイ3章13-17節

そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。

説教

きょうは「主の洗礼」降誕節最後の祝日です。イエスが洗礼を受けたのは30歳ぐらいのことです。教会暦は誕生から洗礼までを降誕節と定めています。

イエスが洗礼者ヨハネのところに洗礼を受けにやってくるところから始まります。そこでイエスとヨハネのやり取りの後、イエスが受洗します。すると、神の霊がイエスにくださったとテキストは証言します。

誰もが疑問におもうことでしょうか、イエスがヨハネから洗礼を受けることは変な感じがします。ふつうに考えればイエスはヨハネの格下になってしまい、ヨハネの弟子扱いになってしまいます。また、ヨハネの洗礼は罪の悔い改めのためのものなのに、罪のないイエスが受ける必要はないでしょう。マタイ福音書はこの件について14-15節にやり取りを記録します。

ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。「わたしこそ、あなたか

ら洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。3:14-15

これを読むと、洗礼に躊躇するヨハネをイエスが押し切ったように読み取れます。しかし、イエス受洗の理由として記されたやりとりから、逆に洗礼にはそれほど意味はなかった、イエスにとっては洗礼より洗礼後の出来事に意味があったと読み取ることもできます。天が開く、霊が降る、天から声が下る、この出来事がこそ重要です。

凡百の人が洗礼を受けていました。でも何か起こったか？何も起きません、変わりません。それでも人々はこぞって洗礼を受けにきました。さばきの火に焼かれるとヨハネが言うので、人は洗礼を受けるのでしょうか。とにかく一生懸命に信仰すると、そうなりがちです。一種の熱狂状態です。また洗礼を受けるほうもそれに応じて憑かれたようになりがちです。

でもイエスは違います。恐縮するヨハネに反してイエスは軽やかな感じがします。よし、おれもいっちょ洗礼を受けるか。それで水からあがると霊が降りた。

洗礼を受けることはみんなと同じだけど、その後はみんなとは違った。授ける人が同じでも、授ける人がイエスだと結果は違う。天が開ける。神の霊が鳩のように降る。

ヨハネがいなければ洗礼はありませんでした。洗礼者ヨハネはその意味において重要です。でもイエスが受けない限りはヨハネの洗礼の意味が成り立ちません。大元である神はこのように洗礼を計画しました。イエス30歳にしてようやく機が熟し神の救いの計画が始動した、主の洗礼とはそういうことです。新しい時代が始まった、イエスを救い主とする時代が始まったということです。

このような意味をもつ「主の洗礼」で教会暦の降誕節は幕を閉じます。
一人ひとりが主の洗礼を救いの喜びの中で祝うことができますように。